

## 「羊の門」

ヨハネの福音書10:1~21

### 1. 強盗と牧者

10:1 「まことに、まことに、あなたがたに告げます。羊の囲いに門からはいらなくて、ほかの所を乗り越えて来る者は、盗人で強盗です。

「あなたがたに告げます」と言われていますが、これは後の記述からユダヤ人たちに語られたものであることが解ります。ではこの「盗人で強盗」という痛烈な批判は、彼らユダヤ人たちに対して向けられたものなのでしょう。イエシュアはこの「盗人で強盗」と呼ばれる存在とご自分を、対照的な位置づけとして、対比させながら、話を進めていかれます。果たして「盗人で強盗」とは一体誰のことを指しているのかという疑問を持ちつつ、イエシュアの語られた御言葉に目を留めていきたいと思えます。

10:2 しかし、門からはいる者は、その羊の牧者です。

10:3 門番は彼のために開き、羊はその声を聞き分けず。彼は自分の羊をその名で呼んで連れ出します。

「盗人で強盗」に対して、「牧者」という存在が提示されます。それは当然イエシュアのことだと考えられます。そして他に「門番」という存在が描かれています。これは牧者が入る道を開く存在ですので、モーセからバプテスマのヨハネに至るまでの旧約の預言者たちのことだと考えられます。なぜならバプテスマのヨハネは、かつて自分についてこう語っていたからです。

### ヨハネ

1:22 そこで、彼らは言った。「あなたはだれですか。私たちを遣わした人々に返事をしたいのですが、あなたは自分を何だと言われるのですか。」

1:23 彼は言った。「私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ』と荒野で叫んでいる者の声です。」

「主の道をまっすぐに」備える、切り開く、バプテスマのヨハネとはまさにそのような存在であることが解ります。これを預言したイザヤもまた当然同じ存在であり、旧約聖書に登場するすべての預言者がそうであると考えられます。その門番である旧約の預言者たちの切り開いた道、門を通して、すなわち彼らの預言の成就として、牧者であるイエシュアが入って来られました。そして牧者は羊の「その名を呼んで」とあるように、羊には名前がつけられていることが解ります。本来羊飼いは、家畜である羊に名前をつけたりはしません。しかしもし名前をつけるとすればそれは、その羊が特別に選ばれ、他と区別されていること、また特別に愛されていることを意味します。イエシュアがその名を呼ぶ羊とは、もちろんイスラエルの民、ユダヤ人たちを指しています。

### イザヤ

43:1 だが、今、ヤコブよ。あなたを造り出した方、主はこう仰せられる。イスラエルよ。あなたを形造っ

た方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」

ここまでの段階でも、神様がいかにイスラエルの民、ユダヤ人たちを特別に選んでおられるかが解ります。そのような存在である彼らを、イエシュアが「盗人で強盗」と呼ぶとは考えられません。彼らはむしろ「自分の羊」だとイエシュアは言われています。

10:4 彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立って行きます。すると羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます。

10:5 しかし、ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げ出します。その人たちの声を知らないからです。」

このたとえもまた神様のご計画の完成を示した神の国、御国の型と考えるべきです。なぜならイエシュアがこの言葉を語られた時点では、誰もそれを理解せず、むしろ拒絶しているからです。弟子たちでさえ理解できず、イエシュアが十字架にかかれる時には、みんな逃げ出してしまい、まったく逆のことが起こります。しかしイエシュアの視点は常に神様のご計画の完成に向けられています。御父からそのご計画の完成をすべて知らされていますので、目に見える状況が、それと全く逆のように見えたとしても、揺るがされることなく語ることができます。それは牧者であるイエシュアご自身が、御父を知り、御父だけについて行く、つき従う方であるためです。

このように、旧約聖書の中では神様に逆らい通し、新約ではイエシュアに逆らい通しのイスラエルの民、ユダヤ人たちですが、神の国、御国においてその姿は一変、激変します。それがここに示されているのです。イエシュアの語られることは常に、神様のご計画の完成である御国に視点をおいたものであると信じます。

10:6 イエスはこのたとえを彼らにお話しになったが、彼らは、イエスの話されたことが何のことがよくわからなかった。

人々が理解できていないのを見ても、イエシュアの話は止まりません。イエシュアにとって理解されるかどうかは、はっきり言って問題ではないのです。それはイエシュアが御父から遣わされた存在であり、ただ御父が語れと命じるままに語っておられるからです。イエシュアにとって重要なのは、ただ御父に、御父だけに従うことであって、そこには一切の個人的感情や独自の考えをはさんでおられないのです。それがイエシュアと御父が一つであるということの内実です。

## 2. 羊の門

10:7 そこで、イエスはまた言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしは羊の門です。」

10:8 わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。羊は彼らの言うことを聞かなかったのです。

そして今度は「わたしは羊の門です。」とイエシュアは語られました。なぜ「羊の門」と言われたのでしょうか。そもそもこの「羊の門」とは一体何でしょうか。この言葉、この名称が聖書で最初に登場するのがネヘミヤ記3:1です。この箇所記されている「羊の門」にまつわる出来事に、イエシュアが言われた言葉の意味

があると考えられます。

#### ネヘミヤ

2:18 そして、私に恵みを下さった私の神の御手のことと、また、王が私に話したことばを、彼らに告げた。そこで彼らは、「さあ、再建に取りかかろう」と言って、この良い仕事に着手した。

2:19 ところが、ホロン人サヌバラテと、アモン人で役人のトビヤ、および、アラブ人ゲシエムは、これを聞いて、私たちをあざけり、私たちをさげすんで言った。「おまえたちのしているこのことは何だ。おまえたちは王に反逆しようとしているのか。」

2:20 そこで、私は彼らにことばを返して言った。「天の神ご自身が、私たちを成功させてくださる。だから、そのしもべである私たちは、再建に取りかかっているのだ。しかし、あなたがたにはエルサレムの中に何の分け前も、権利も、記念もないのだ。」

3:1 こうして、大祭司エルヤシブは、その兄弟の祭司たちと、羊の門の再建に取りかかった。彼らはそれを聖別して、とびらを取りつけた。彼らはメアのやぐらまで聖別し、ハナヌエルのやぐらにまで及んだ。

この箇所は、バビロンによって滅ぼされ、その後ペルシャによって支配されていたエルサレムに、ネヘミヤを指導者としたユダヤ人たちが、エルサレムの街を再建させることが描かれている箇所ですが、その初めの第一歩がこの「羊の門」の再建だったということが記されています。大祭司たちはエルサレムの再建を、この「羊の門」を再建することから始めたのです。しかしその再建は、決して称賛された、受け入れられたものではなく、異邦人たちの激しい迫害の下で行われたことが記されています。しかし彼らはそれに耳を貸すことなく、まさに「羊は彼らの言うことを聞かなかった」とあるように、人々の理解などおかまいなしに語り続けるイエシュアの姿と結びつくように、「羊の門」から始めて、エルサレムの再建に取りかかったのです。

このように「羊の門」とは、神の家であるエルサレムを再び建て直すことを象徴していると考えられ、それが「わたしは羊の門です」と言われたイエシュアから、イエシュアを起点として神の国、御国が建て上げられることを示しておられると考えられます。また逆を言えば、「羊の門」を建てずして、エルサレムの再建が始まらないように、「イエシュアなくして神の国は建たず」ということでもあると思われます。イエシュアがメシアとして、王として立つてこそ、神の国、御国は再建されるということです。

### 3. 門

10:9 わたしは門です。だれでも、わたしを通過してはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。

さらにイエシュアは、「わたしは門です」と言われました。先ほどは「羊の門」でしたが、ここではただの「門」と言われました。おそらく「羊の門」とは別の意味があると考えられます。「門」はヘブル語でシャアル(שַׁאֲר)と言います。この言葉が聖書で初めて用いられるのが創世記19:1の記述です。

#### 創世記

19:1 そのふたりの御使いは夕暮れにソドムに着いた。ロトはソドムの門のところにもすわっていた。ロトは

彼らを見るなり、立ち上がって彼らを迎え、顔を地につけて伏し拝んだ。

この箇所は、その罪の大きさのゆえに、天から下ってきた火によって滅ぼされた、ソドムとゴモラの町の出来事です。ソドムに住んでいたアブラハムの甥のロトは、門のところに「すわっていた」ヘブル語でヤーシャヴ(יָשָׁב)と記されています。ヤーシャヴは「住む、とどまる」ことをも意味する、神の国、御国を指し示すヨハネの福音書のキーワード的な言葉です。ちなみに先ほどネヘミヤ記でエルサレムの再建に取りかかった大祭司はエルヤシブ(エルヤーシーヴ(יְרֵמְיָהוּ))で、その意味は「神にとどまる」でした。イエシュアはご自分を指して「門」と呼ばれましたので、門のところにすわっていたロトは、イエシュアにヤーシャヴする、とどまる者の型と考えることができます。イエシュアにとどまる者は「救われます」。事実ロトはソドムとゴモラの滅びから免れるのです。興味深いことに、このソドムとゴモラの人々も、実際に目つぶしをくらって盲目にされてから滅ぼされました。また「安らかに出入りし」とありますが、これは単に出たり入ったりするという意味ではなく、生きることの営み全般を意味する表現です。つまり「イエシュアとともに安らかに住まう」ことが表されています。

#### 4. 良い牧者

10:10 盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。

ここで10章の冒頭で語られた「盗人で強盗」の性質について言及されています。彼らは「ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけ」です。これは人間の性質ではありません。人間がこのようなことをする時には必ず動機があるからです。それは正当な理由ではなく、欲や妬みや怒りや恨みが原因であるかもしれませんが、何の動機もなしに、理由なく人間は人間を殺したり盗んだりしません。パリサイ人などのユダヤ人の指導者たちがイエシュアを拒絶し、殺そうとするのにも理由があるのです。それはユダヤ人の指導者である自分たちの地位が危うくなるためです。理由の良し悪しはともかく、ただ殺したいわけではありません。ですからこの「盗人」とは彼らのことではないと言えます。そしてこの「盗人」とまったく対照的な存在が「羊がいのちを得、豊かに持つ」ために来られるイエシュアです。

10:11 わたしは、良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。

さて今度は良い牧者のたとえです。「羊のためにいのちを捨てる」という言葉から、すぐ十字架が連想できます。ここで言われる牧者は羊飼い、つまり羊を飼う者のことですが、羊を「飼う、養う」ことをヘブル語でラーアー(רָאָה)と言い、創世記4:2で初めて使われています。

#### 創世記

4:2 彼女は、それからまた、弟アベルを産んだ。アベルは羊を飼う者となり、カインは土を耕す者となった。

アダムとエバの間に生まれた最初の子ども、カインとアベル。弟アベルは羊をラーアー、飼う者となりました。このラーアーは「飼う、養う」の他に「交わる、親しくする」という意味もあり、その名の通り、彼は神様に受け入れられました。しかし兄のカイン逆に拒まれました。妬みにかられた兄は弟を殺してしまいます。人類

史上最初の殺人、その最初の犠牲者がこの牧者アベルです。この箇所からイエシュアはご自分をアベルにたとえて神様に受け入れられる存在であり、ラーアー「交わる、親しくする」ことができる方であることを示しておられ、またカインの妬みによってアベルが殺されたように、イエシュアもまたユダヤ人たちの妬みによって殺されること、十字架にかけられることを示唆しておられると考えられます。

10:12 牧者でなく、また、羊の所有者でない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして、逃げて行きます。それで、狼は羊を奪い、また散らすのです。

10:13 それは、彼が雇い人であって、羊のことを心にかけていないからです。

「羊の所有者でない雇い人」は、牧者のようではないので、牧者のようにその務めを果たすことができません。この「雇い人」こそがパリサイ人などのユダヤ人の指導者たちを指し示すものであり、彼らの働きが牧者であるイエシュアの足元にも及ばないことが示されています。この表現の仕方は、「雇い人」を悪として断罪しているのではなく、牧者であるイエシュアの素晴らしさを強調しているのです。ですから他に悪とされるものが記されています。それは「狼」です。羊を奪い、散らすこの存在が、10章の冒頭で語られた「盗人で強盗」であり、10:10で語られていた「ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりする」ものにつながると考えられます。これが人間ではないことを先ほど述べました。つまりこれは「偽りの父」「初めから人殺し」ともいわれた、悪魔を指すものであると考えられます。イエシュアの敵は人間ではなく、ユダヤ人でも異邦人でもありません。サタンと呼ばれる悪魔と、そして最後の敵である「死」だけです。

## I コリント

15:24 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。

15:25 キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。

15:26 最後の敵である死も滅ぼされます。

この「死」が滅ぼされるとは、誰も死ななくなること、すなわち永遠に生きることができるようになることを意味します。

## 5. アベル

10:14 わたしは良い牧者です。わたしはわたしのものを知っています。また、わたしのものは、わたしを知っています。

10:15 それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同様です。また、わたしは羊のためにわたしのいのちを捨てます。

羊を「飼う、養う」こと、そして「交わる、親しくする」ことという二つの意味を持ったラーアー(רָעָה)が表されている記述と言えます。そしてそれがカインによって殺された、いのちを捨てたアベルに表されていると述べました。このアベル(ヘヴェル(הָבֶל))という名前は「虚しい、つまらないこと」という意味があります。神の御子である方が、そのあり方を捨てて、ご自分を無にして、卑しくして、まさにヘヴェルとられました。それがイエシュアです。

## ピリピ

2:6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、

2:7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、

2:8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。

2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかかめ、

2:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、**父なる神がほめたたえられるため**です。

イエシュアがヘヴエルとなられた究極の目的は、ここに記されているように「父なる神がほめたたえられるため」です。イエシュアの思い、願い、すべての言動、その全存在がこの一時につながっているのです。そしてそれはイスラエルの民、ユダヤ人だけではなく、「すべての口が」とあるように、異邦人についても述べられています。

## 6. 異邦人

10:16 わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。

「この囲いに属さないほかの羊」、「この囲いに属する羊」がイスラエルの民、ユダヤ人であるならば、それに属さないほかの羊とは当然「異邦人」のことだと考えられます。このように、イエシュアが語られる神の国、御国にはユダヤ人と異邦人という、二つの囲い、区別が存在することが解ります。それは神様がアブラハムと交わされた約束、契約が成就されるためです。

## 創世記

12:2 …わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。

12:3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。

アブラハムの子孫であるイスラエルの民、ユダヤ人と、異邦人を混ぜ合わせてしまうと、この契約は成就できなくなってしまうのです。そうなれば神様は契約を違反したことになり、またご自分の計画において失敗したことになってしまいます。それゆえに神の国においてもこの二つの囲い、ユダヤ人と異邦人という区別は存在するのです。そしてそれによって「地上のすべての民族は、祝福される」のです。

## 7. テスト

10:17 わたしが自分のいのちを再び得るために自分のいのちを捨てるからこそ、父はわたしを愛してください。

10:18 だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」

「いのちを捨てる」と、この場面でイエシュアが語られたのはこれで三度目です。そしてさらに繰り返しておられます。ここではその理由が記されています。それは「いのちを再び得る」ためであると語られています。捨てたいのちを再び得ること、つまり一度死んでもう一度生き返ること、すなわち「復活」です。よく見ると17節と18節が対句になっています。つまり同じ内容について、ここでは「復活」について、17節の内容を言い換えて、18節でもう一度語ることでその意味を深め、重要性を強調しておられると考えられます。そのように考えるならば17節の「父がわたしを愛してくださいます」という部分が18節では「命令を父から受けたのです」と言い換えられていることになり、父が「愛する」と父が「命令する」に何らかの関連性がなければなりません。ヘブル語で「愛する」はアーハヴ(אהב), そして「命令する」はツァーヴァー(צוה)という言葉がそれぞれ使われています。この二つの言葉が聖書で初めて使われている箇所を見比べてみたいと思います。

## ・「愛する」アーハヴ(אהב)

## 創世記

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」

## ・「命令する」ツァーヴァー(צוה)

## 創世記

2:16 神である主は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

2:17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ。」

この二つの箇所には、大きな共通点があることが解ります。それはどちらも「神様が人を試しておられる」、神様に聞き従うかどうかをテストしておられるということです。アブラハムはイサクをささげるということにおいて、アダムは善悪を知る木から食べてはならないということにおいて、神様に聞き従えるかどうかを試されたのです。二つの結果は全く対照的なものとなりました、すなわちアブラハムは合格し、アダムは失敗したのです。そしてイエシュアもまた、いのちを捨て再び得る、死と復活ということにおいて、神様から試されたということがこの「愛する、アーハヴ」と「命令する、ツァーヴァー」という言葉の中に示されていると考えられます。そしてその結果は、アダムの名誉挽回をするかのごとく、十字架の死と復活によって見事合格したのです。このように、イエシュアの十字架の死と復活は、アブラハムが神様に聞き従うことで、神様に選ばれた民族としてのイスラエルの地位を獲得したように、イエシュアが天と地にあるものすべてがひざをかがめると高き神の御子、王の王、主の主、すなわち「メシア」としての地位を獲得するための、神様からのテスト、

試みであったとすることができます。つまりイエシュアの十字架の死と復活を信じることは、イエシュアがメシアであると認め、それを受け入れることと同義であると言えます。ですからイエシュアの死と復活が信じられないならば、イエシュアがメシアであることも受け入れられないし、その逆もまた然りです。

10:19 このみことばを聞いて、ユダヤ人たちの間にまた分裂が起こった。

10:20 彼らのうちの多くの者が言った。「あれは悪霊につかれて気が狂っている。どうしてあなたがたは、あの人の言うことに耳を貸すのか。」

10:21 ほかの者は言った。「これは悪霊につかれた者のことばではない。悪霊がどうして盲人の目をあけることができようか。」

イエシュアの死と復活を信じられるか否か、すなわちイエシュアがメシアであることを受け入れられるか否か、これを基準にしてすべての人間の中に「分裂が起こる」、分けられる、裁かれることが表されています。その分裂とはすなわち「救い」か「滅び」か、永遠の御国か火の池かという二つの結末に直結するのです。つまりすべての人間が、イエシュアという存在を置くことによって神様にテスト、試されているのです。イエシュアというお方が、この世界にとって、私たち一人ひとりにとって、どれほど重要な存在であるかということ、私たちはもっともっと知らねばなりません。神様が、私たち人間に与えられた基準は、ただイエシュアだけなのですから。

#### 使徒

4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。